

二

木立の影が、街を涼しげにしているダマスカスを朝早く登って、ソロモン王の建てたというシリヤ砂漠の中のパルミラの神殿跡を訪ねた。

よく走りつづけて、陽が西向きの砂丘を彩る時分に、やつとあの大石柱の林立する有名な宗教遺跡の壮观を望見する地点に停った。この神殿の外周にある丘陵は、墓の谷とも呼ばれるほど多くの石造墓室があり、大きなもの小さなもの、あるいは地下におりるものなど、みな堅牢な柵のように造られて、何段にも遺骸の棺が納められるようになっていた。

その暗い大きな玄室を出てきた眼に、あかね色に染まった広い広い砂丘を向こうから点々と黒いものがやってくる。

遊牧民のテントの方につれてゆかれる。このラクダの一群はまずまず数を増し、みずから隊列を造って、追う者も無言、ラクダも黙々、仔のラクダはすれすれに親のそばに附いて、はるかな墓の谷の彼方に去って夕闇のとばりとなつてしまった。

これは今度の旅で見た一番たくさんのラクダ群であった。さすがに二、三世紀の時分から栄えたシルクロード要衝の故地である。

帰りの路傍でも、たくさんのラクダをひきいて移動する遊牧の家族、地にはりつけたような黒いテントと周りにさまようラクダ・山羊の群、まるで絵のようなむかしながらの光景を目撃しながら、はるばると帰ってきた。

この数日前はバグダッドにおいて、市を南の方へ出てクテシフォン宮殿跡の方へ行った。

半砂漠のような中に鉄道も見え、かなりのスピードで自動車の往来も多かったのに、チグリス川・国道・鉄道などに挟まれながら遊牧民が炊事をしたり牧畜もしているのを見た。

そのラクダたちが、時々ゆるゆると道路を横断するので、疾走の

トラックなども完全にストップをくって、ゆつくりと待たされている。全く「砂漠の船」という表現にピッタリの光景に苦笑する。

と、前方に何か黒いものが横たわっているなど見る一瞬、私たちの車も相次いでその上を疾走して過ぎた。

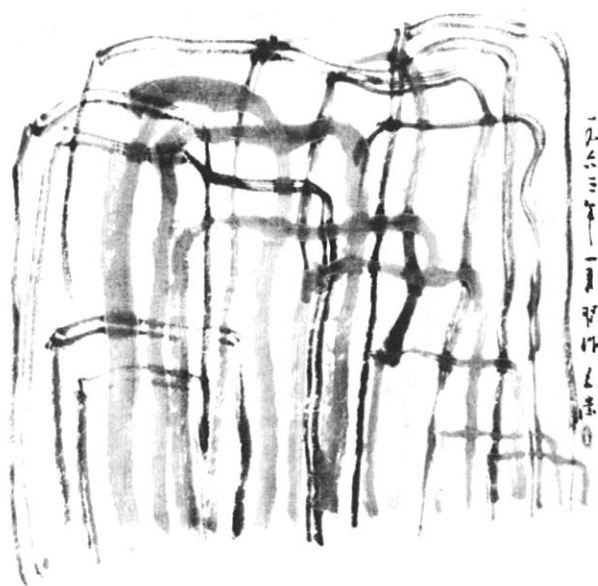
帰途に見ると、車にハネとばされたラクダの屍体は、平均百キロで走る車には避けようもなく、ラクダの形のまんま平つたのさ

れてしまつていた。

文明は容赦なく古いものを押し倒してゆく哀れさが、誰の脳裏をもかすめたものか、しばらく車中の同行はものをいわなくなつてしまった。

〈「たかむら」、昭和四十二年三・五月〉

『筆間雑記』中村素堂随筆集昭和六十三年刊より転載。



『墨象』昭和38年